

3 三条実万公事蹟絵巻

田中有美(詞西園寺公望) 十五卷

絹本着色 明治三十七年(一九〇四)

縦三三・〇〇〜三三・三

長七〇・二・六〜八五四・三

岩倉具視、三条実美と明治の元勳二人の二代絵巻を描き終えた田中有美が、次に取り組んだのが実美の父三条実万(一八〇二〜五九)の絵巻制作であった。これは、明治三十五年(一九〇二)の十月、かつて七卿落ちにも随行した伯爵土方久元(補左衛門)が「三条実美公事蹟絵巻」(作品番号2)の例にならい、幕末に朝権回復を目指して奔走した三条実万の事蹟を絵巻に編成することを明治天皇に申し出たことから始まった。絵の制作は有美が担当し、詞書は東久世通禧が起草して西園寺公望が浄書することとなった。当初は七巻ほどの予定であったが、詞書制作の進行に伴い巻数が増え、明治三十七年十月に全十五巻の絵巻として完成した。絵巻は十一月に天皇の御手元へ上げられ、西園寺公望、土方久元、東久世通禧には慰労金と縮緬が下賜され、有美も金百円を賜った。

各巻の内容は次の通りである。三条実万本人にまつわる出来事だけでなく、大塩平八郎の乱や米国使節ハリスの国書捧呈など幕末動乱期の象徴的な出来事がいくつか選択されている点が興味深い。

【第一巻】(第一段)平安時代末、藤原実行、三条万里小路に邸を移し三条と号す。(第二段)文化九年、父公修より舞踏伝授。(第三段)鉄鑿を含む。

【第二巻】(第一段)十一歳にして元服し入朝拝賀する。(第二段)文化十四年、先帝桜町御所に移り給う。(第三段)文政二年、眉拭の式を行う。

【第三巻】(第一段)文政三年、和歌勅点を賜う。(第二段)文政七年、婚儀を行う。(第三段)神宮上卿となり関白と神宮火除地の事を議する。

【第四巻】(第一段)天保二年、議奏役心得を制定する。(第二段)天保八年、大塩平八郎、兵を起す。(第三段)天保十二年、鷹司輔熙、泉涌寺へ先帝の諡号を告げ祀る。

【第五巻】(第一段)弘化四年、孝明天皇即位の大礼を行い給う。(第二段)嘉永元年、勅使として江戸に下る。(第三段)関白邸において催馬楽を演じる。

【第六巻】(第一段)嘉永五年九月、皇太子御降誕。(第二段)関白外交について意見を演述する。(第三段)嘉永六年、江戸城にて老中と討議する。

【第七巻】(第一段)安政元年、京都警備を謀り書を水戸藩に送る。(第二段)四月、御所炎上。

【第八巻】(第一段)御所再建にあたり小御所障子色紙に和歌を詠進する。(第二

段)徳川斉昭、水戸に蟄居する。(第三段)安政元年六月、地震の折参内する。【第九巻】(第一段)九月、露国軍艦天保山沖に来る。(第二段)安政二年、所司代脇坂安宅ら参朝し外事を奏上する。(第三段)十一月、皇居還幸に供奉する。【第十巻】(第一段)安政四年五月、近衛邸において島津斉彬らと密会する。(第二段)禁苑の門聯に字を揮毫する。(第三段)十二月、江戸溜語諸侯登城する。【第十一巻】(第一段)安政五年二月、橋本左内に謁す。(第二段)堀田正睦、開港について公卿らと論争する。(第三段)富田基建を江戸の山内容堂のもとへ密かに遣わす。

【第十二巻】(第一段)米国使節、將軍に国書を捧呈する。(第二段)諸藩の志士と密会する。(第三段)宮中にて佐幕派公卿らを問いただす。

【第十三巻】(第一段)安政五年十一月、西郷吉之助、僧月照とともに海に身投げする。(第二段)水戸藩邸において鶴飼父子捕縛される。(第三段)安政六年正月、入江則精、夜半公を訪ねる。

【第十四巻】(第一段)宋の武人韓世忠に自らの境遇を重ねる。(第二段)安政六年二月、家臣森寺常安ら囚人として江戸に送られる。(第三段)三月、石清水正遷宮を遥拝する。(第四段)一乗寺村に幽居する。

【第十五巻】(第一段)安政六年四月、落飾。(第二段)僧と禅理を談ずる。(第三段)明治十八年、梨木神社に祀られる。

絵巻の見返しは、金銀の切箔、砂子が散らされた地に梨の花の一枝が描かれる。この梨は、第一巻から第十五巻にかけて蕾から徐々に開花し、果ては散つた後に実を付けるまで姿を変えていく。三条家の本邸は京都の梨木町にあり、実万が没するとその地に梨木神社が創建され実万は御祭神として祀られた。子の実美も「梨堂」と号し、没後は同じく梨木神社に合祀されるなど、三条父子にとって梨は縁の深いモチーフであった。こうした趣向を凝らした見返しをはじめ、詞書の下地や絵巻の裏地にも金銀泥の様々な文様が散らされており、三条実美の絵巻と同様、有美の装飾性への強いこだわりがうかがえる。



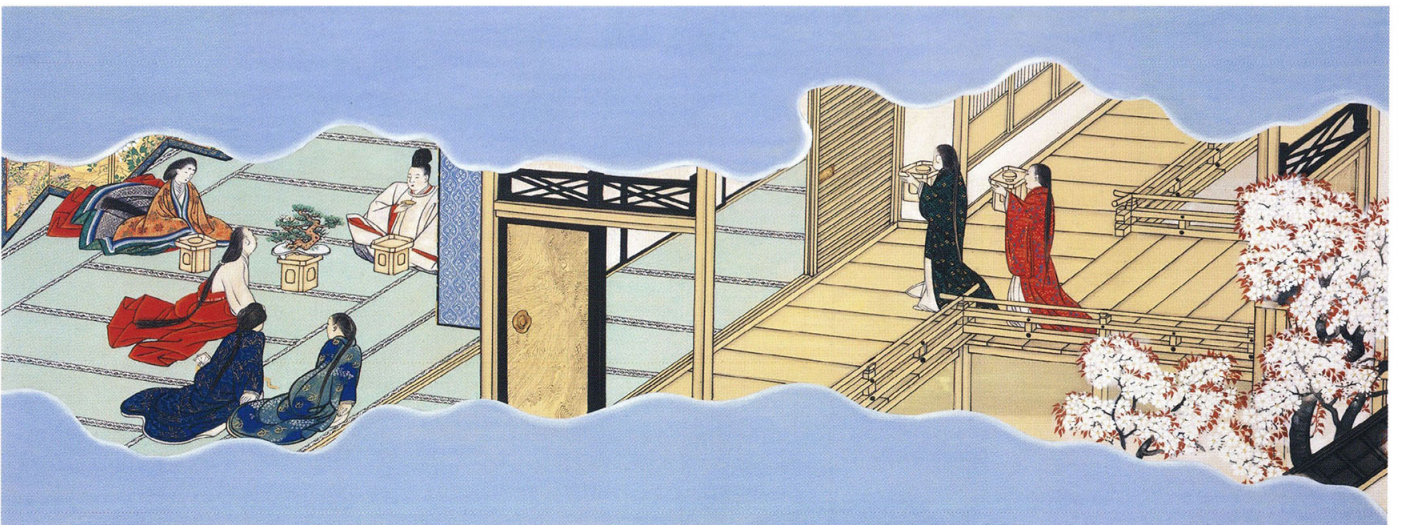
巻姿



文化9年(1812)、初めて鉄醬を含む。 第1巻第3段



文政2年(1819)、18歳となり勅許を得て肩拭の式を行う。 第2巻第3段



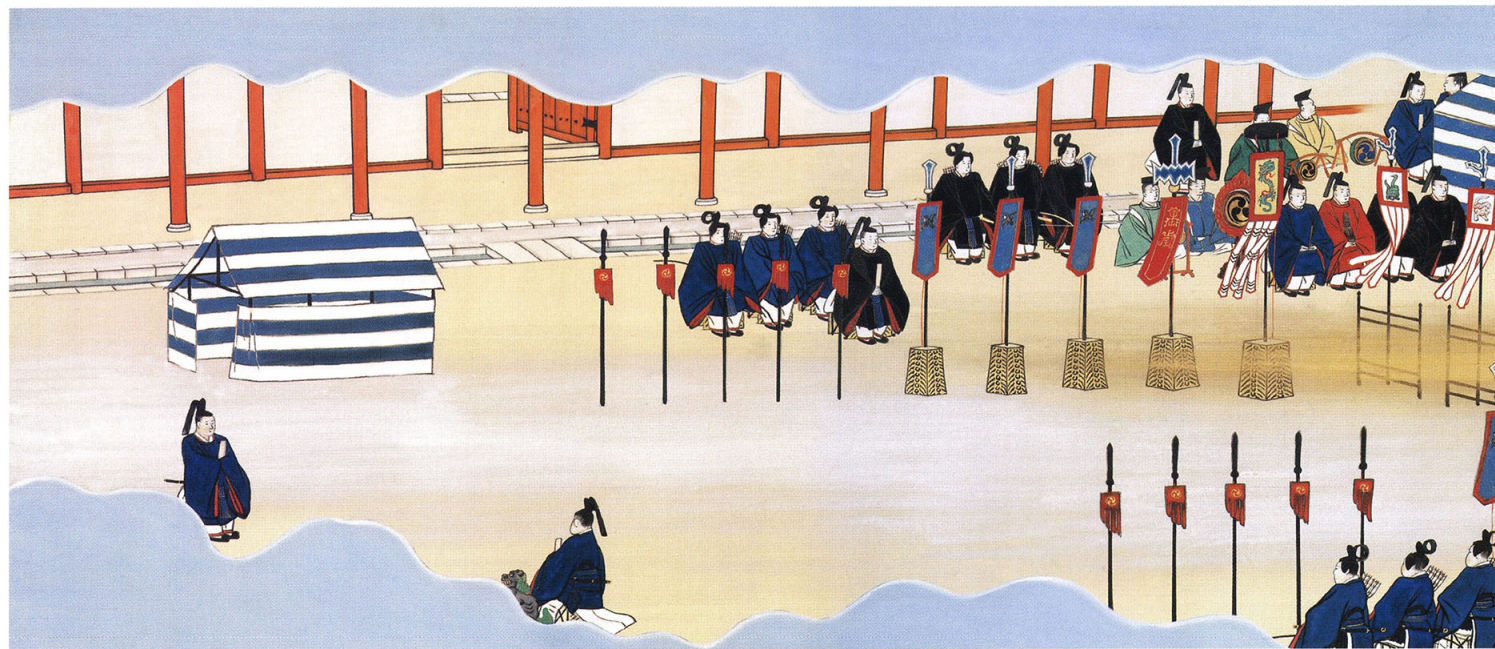
文政7年(1824)、土佐藩山内豊策第三女紀子と婚儀を行う。 第3巻第2段



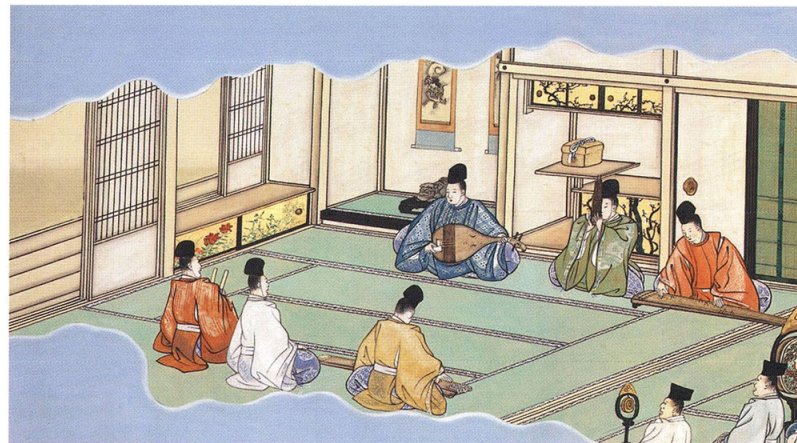
天保8年(1837)、大塩平八郎、窮民を救うべく兵を起こす。 第4巻第2段



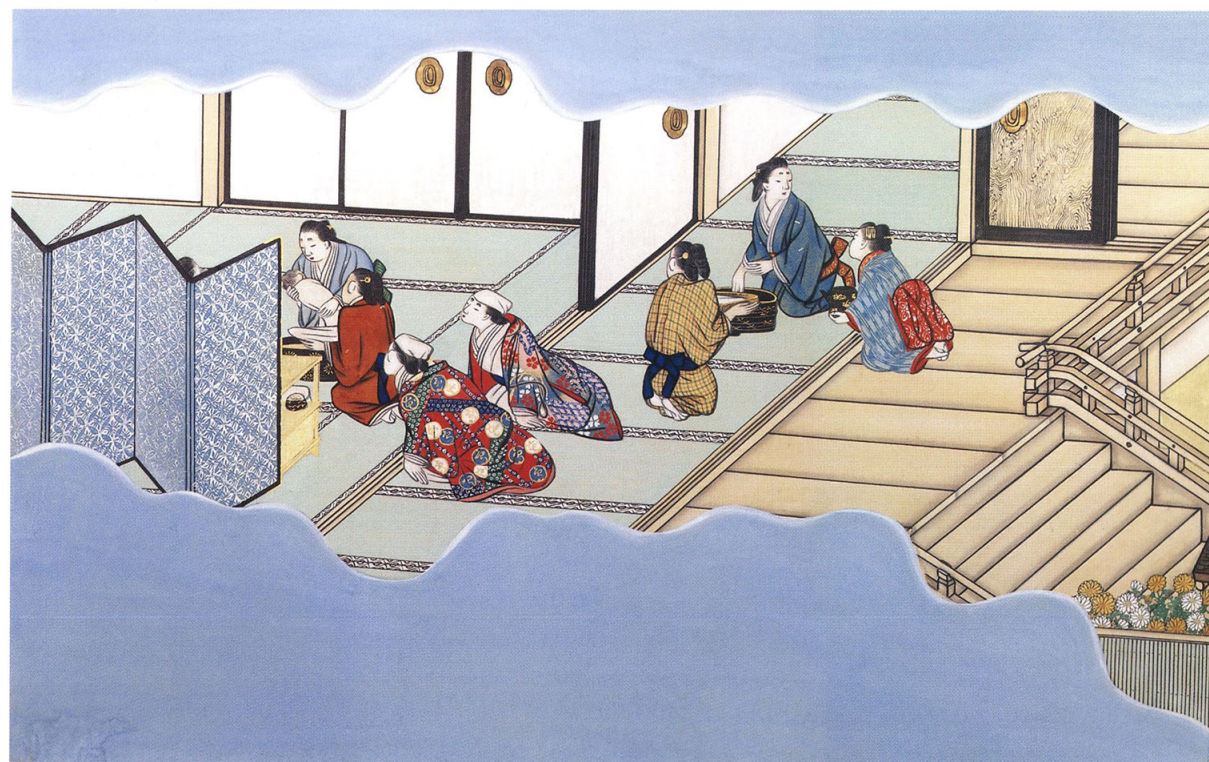
天保12年(1841)、鷹司輔熙、泉涌寺へ先帝(光格天皇)の諡号を告げ祀る。 第4巻第3段



弘化4年(1847)、紫宸殿にて孝明天皇即位の大礼を行い給う。 第5巻第1段



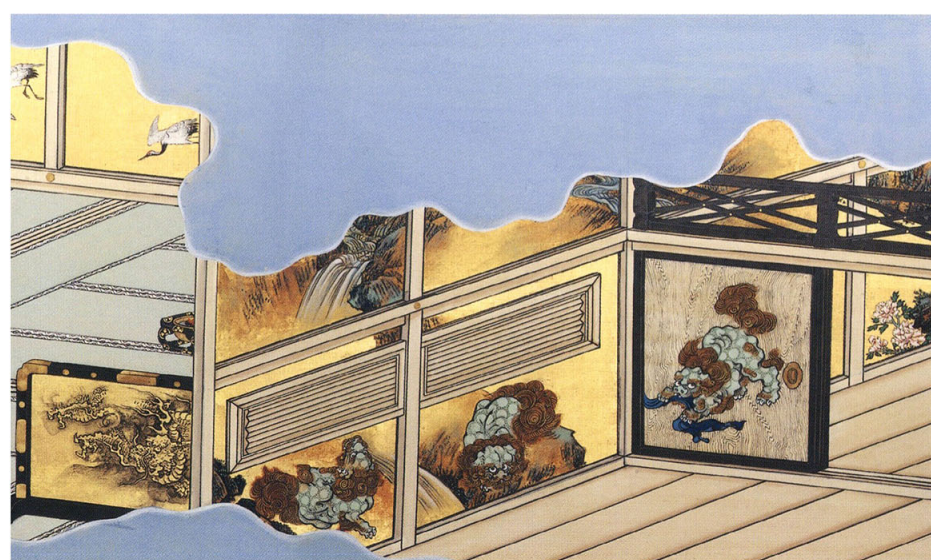
関白鷹司政通の邸において催馬楽を演じる。 第5巻第3段



嘉永5年(1852)9月22日、皇太子(後の明治天皇)御降誕。 第6巻第1段



嘉永6年(1853)11月、江戸城において老中らと異国船処分について討議する。

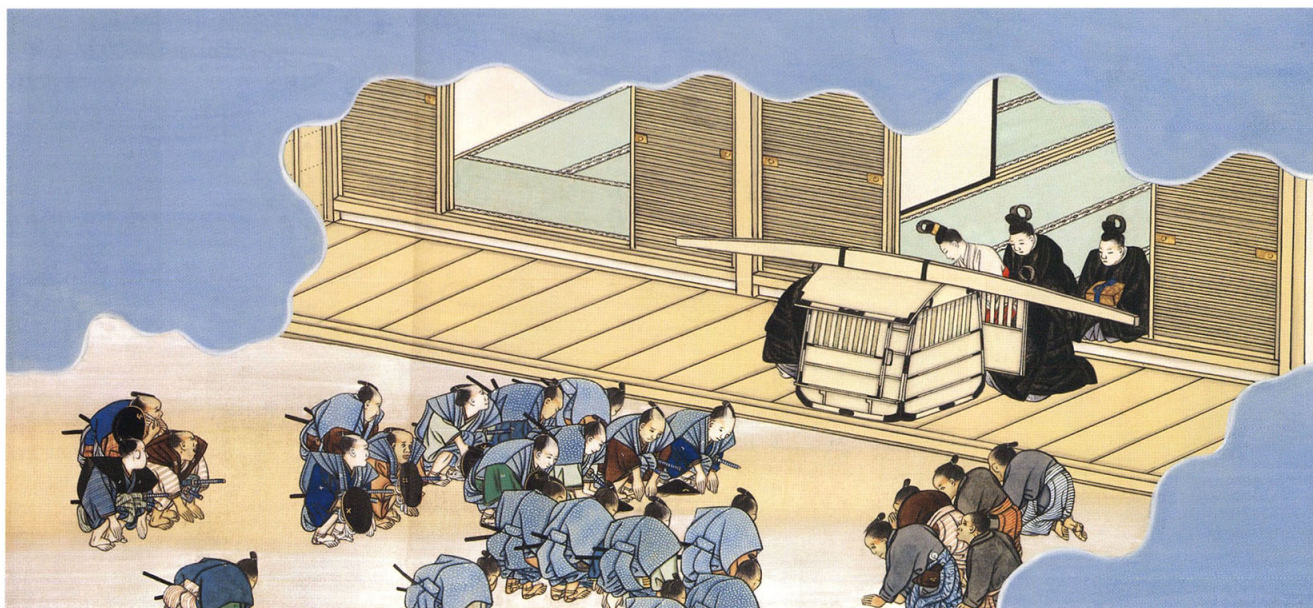


第6巻第3段



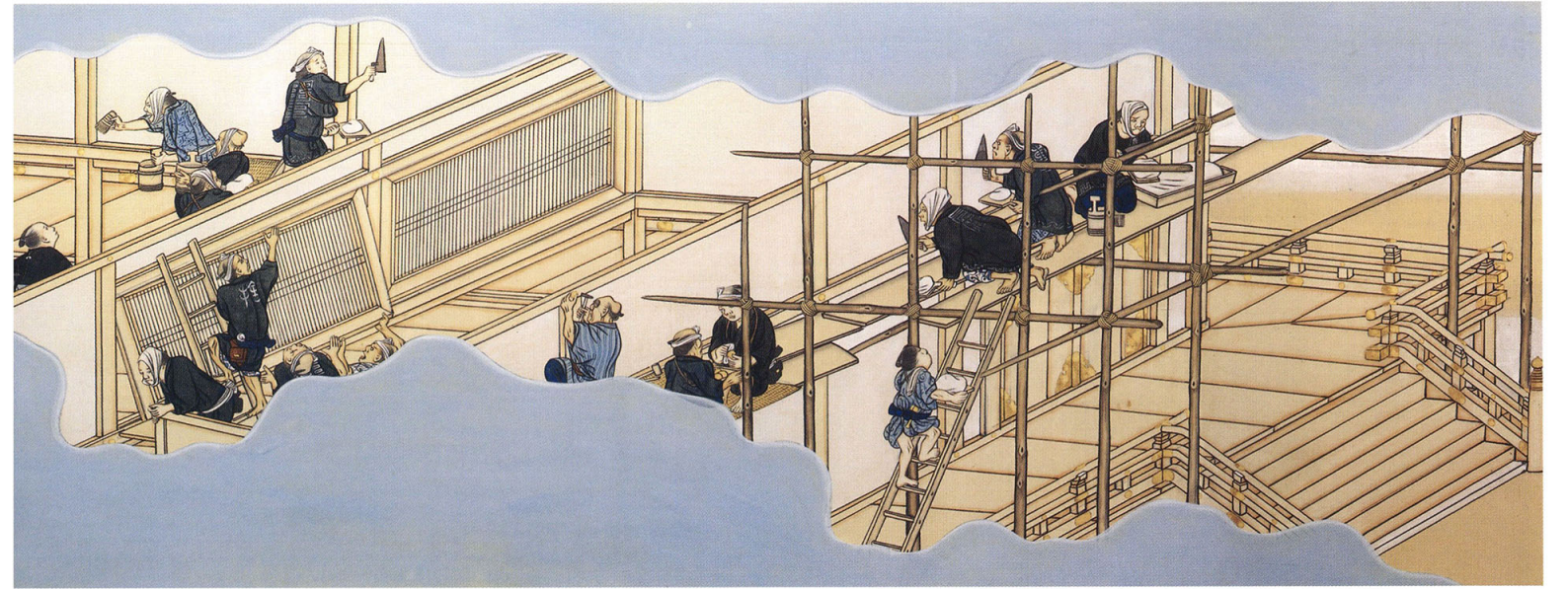
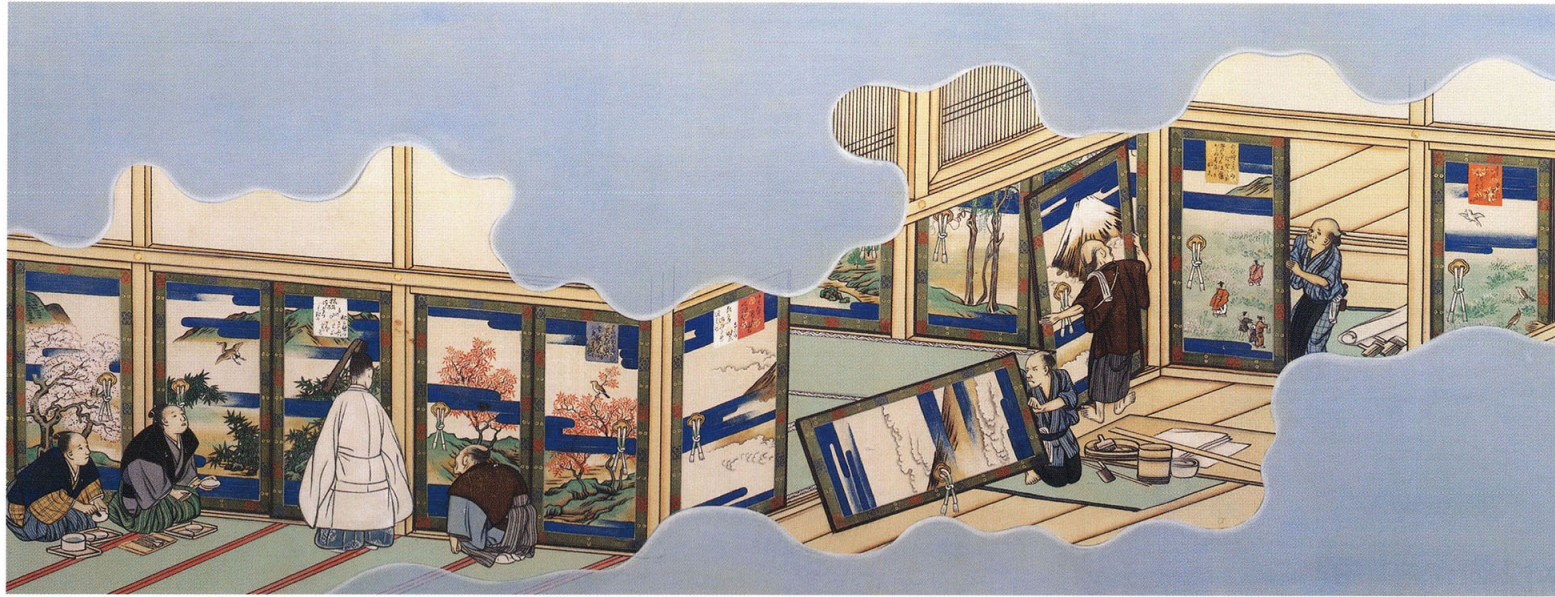
安政元年(1854)4月、御所炎上。

第7巻第2段



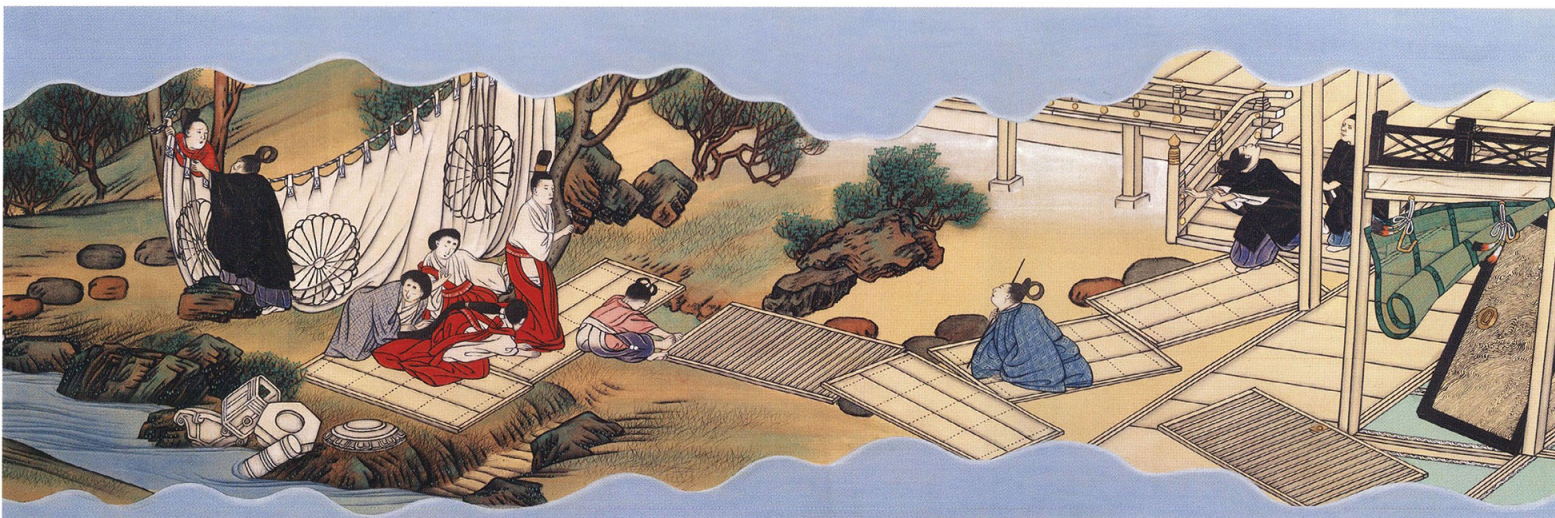
難を逃れるべく下野に行幸する孝明天皇



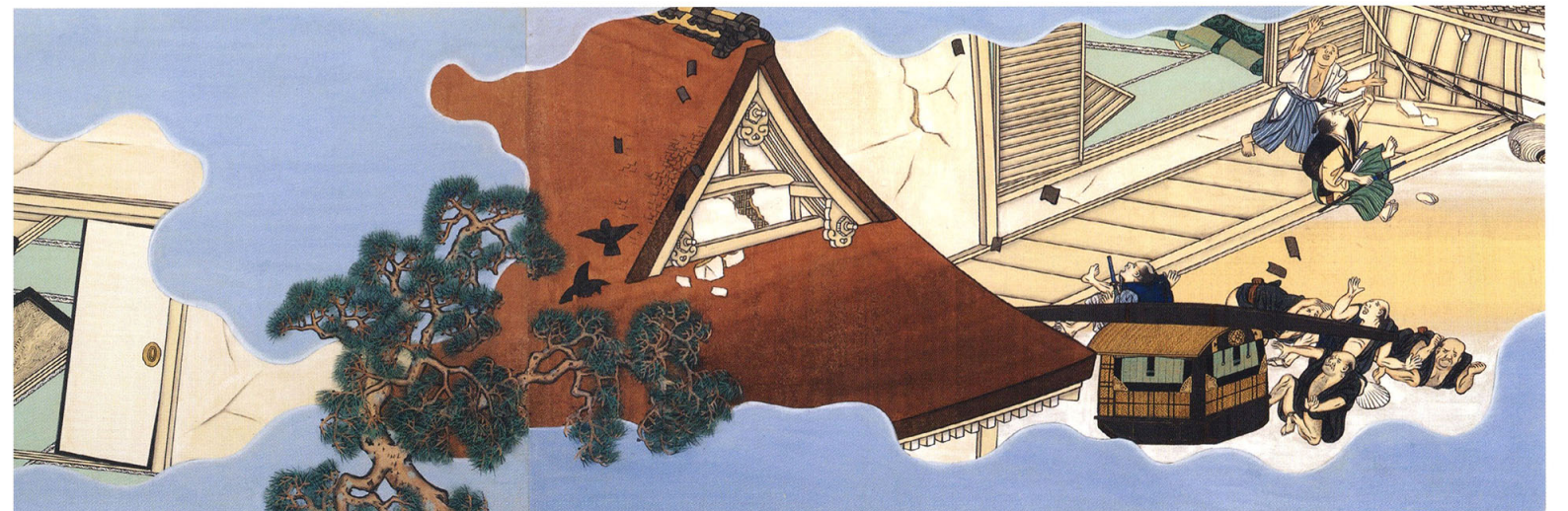


焼失した御所の再建に際し、古制に則り障子に和歌色紙を配し、描く絵もその歌意によるものとする。

第8巻第1段



孝明天皇のもとに病床の身をおして馳せ参じる実万



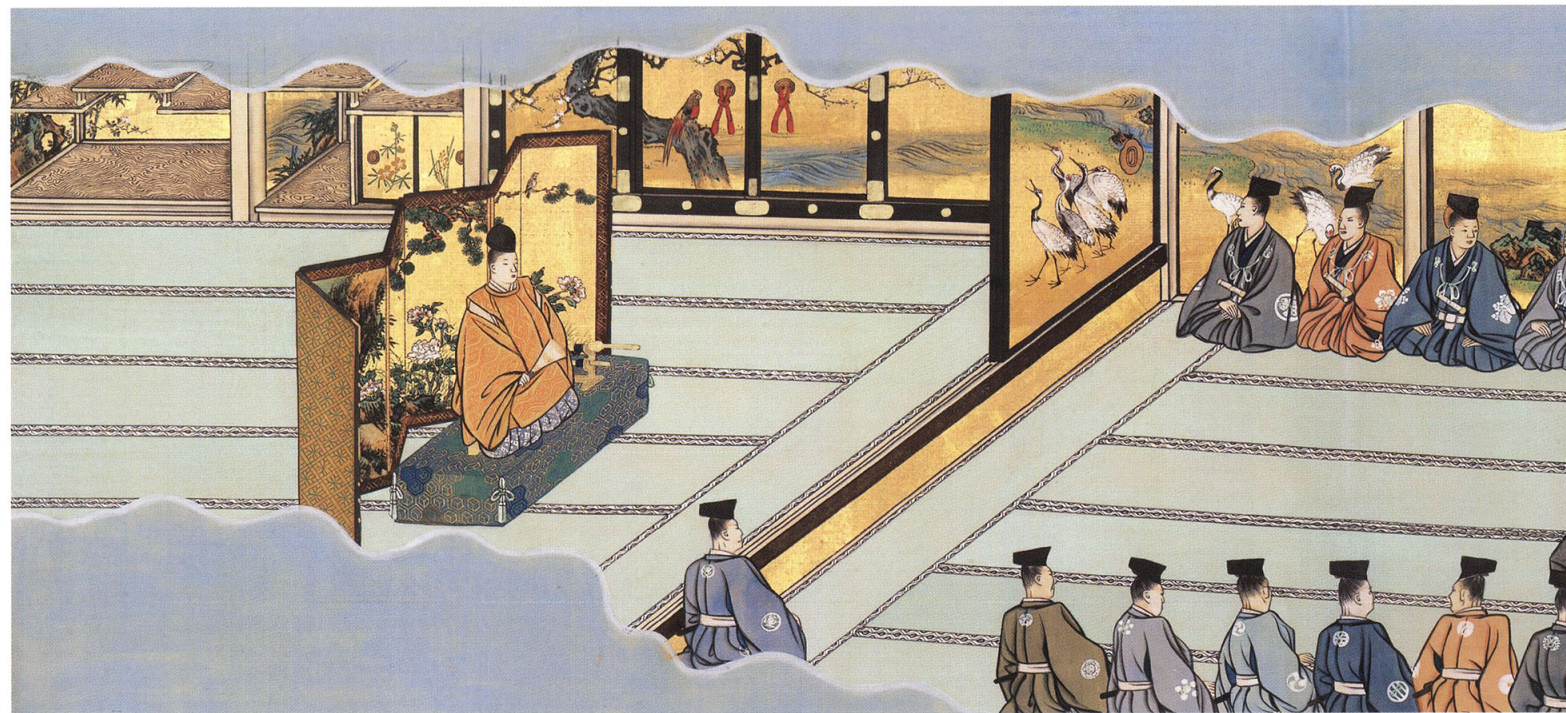
安政元年(1854)6月15日、大地震が起きる。

第8巻第3段



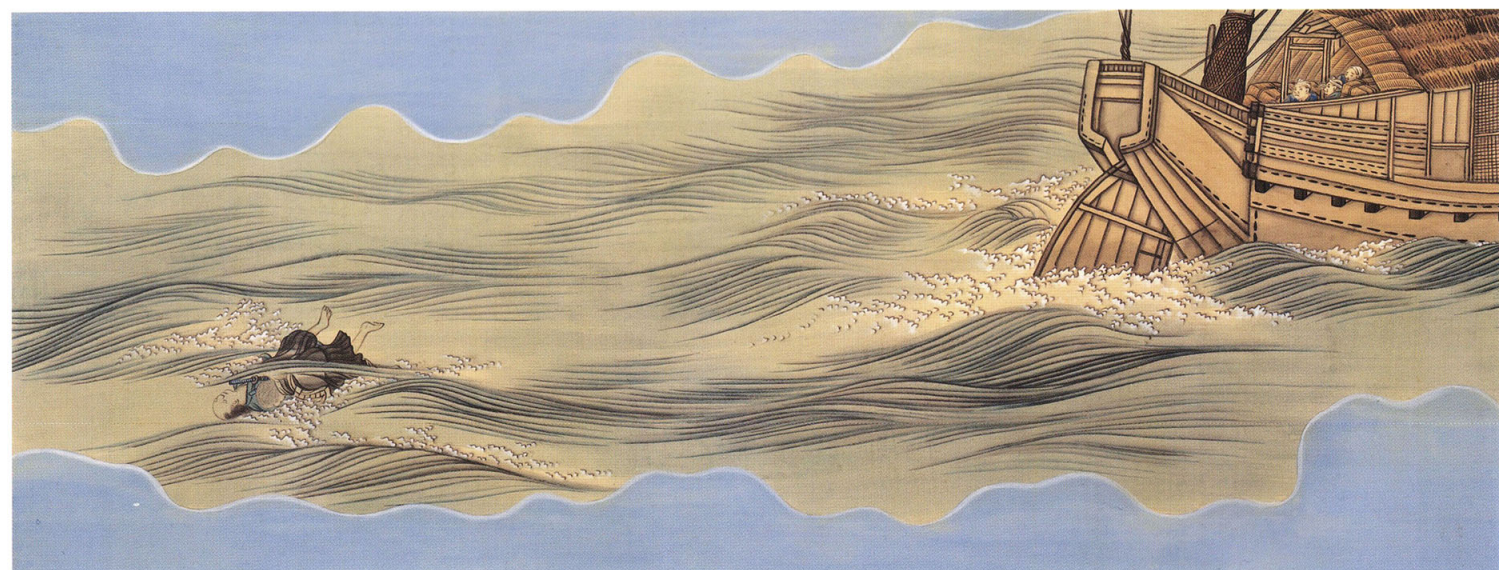
地震の動揺も冷めやらぬ安政元年(1854)9月、露国軍艦大坂天保山沖に現れる。

第9巻第1段



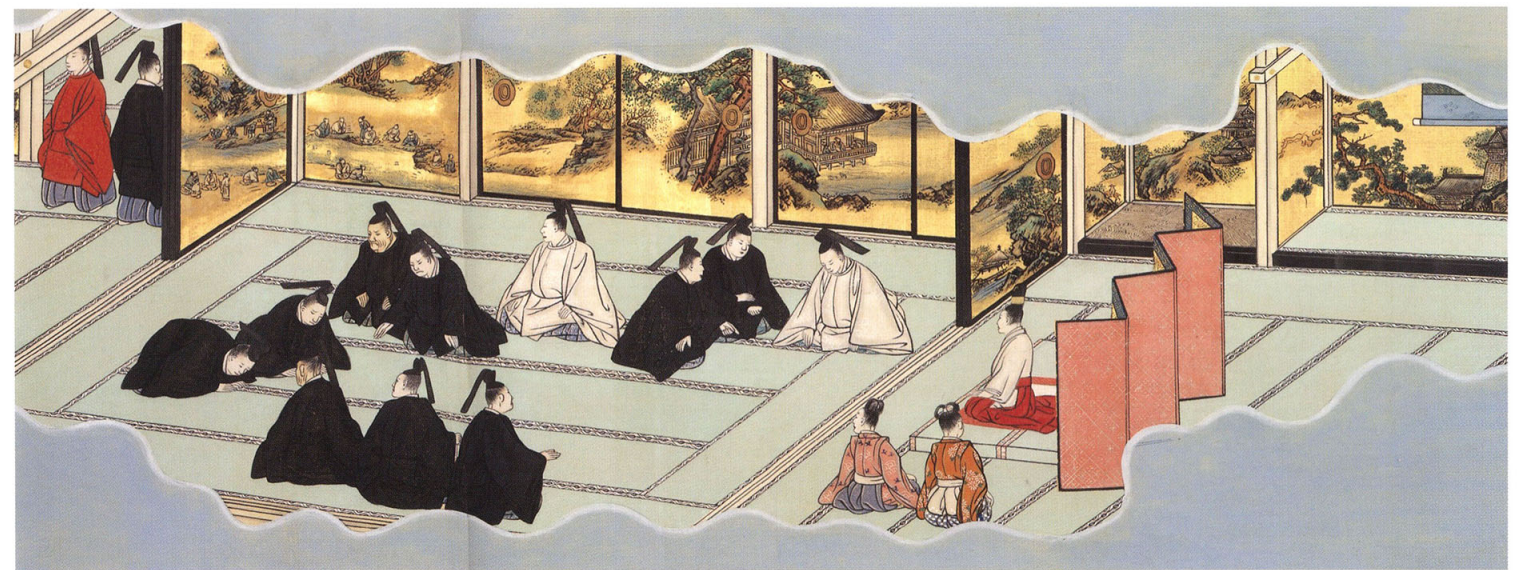
安政4年(1857)10月、米国使節ハリス、江戸城にて將軍家定に国書を捧呈する。

第12巻第1段



安政5年(1858)11月、勤王志士らが幕府によって次々と捕らえられる中、進退窮まった西郷吉之助(隆盛)は僧月照とともに錦江湾に入水する。

第13巻第1段

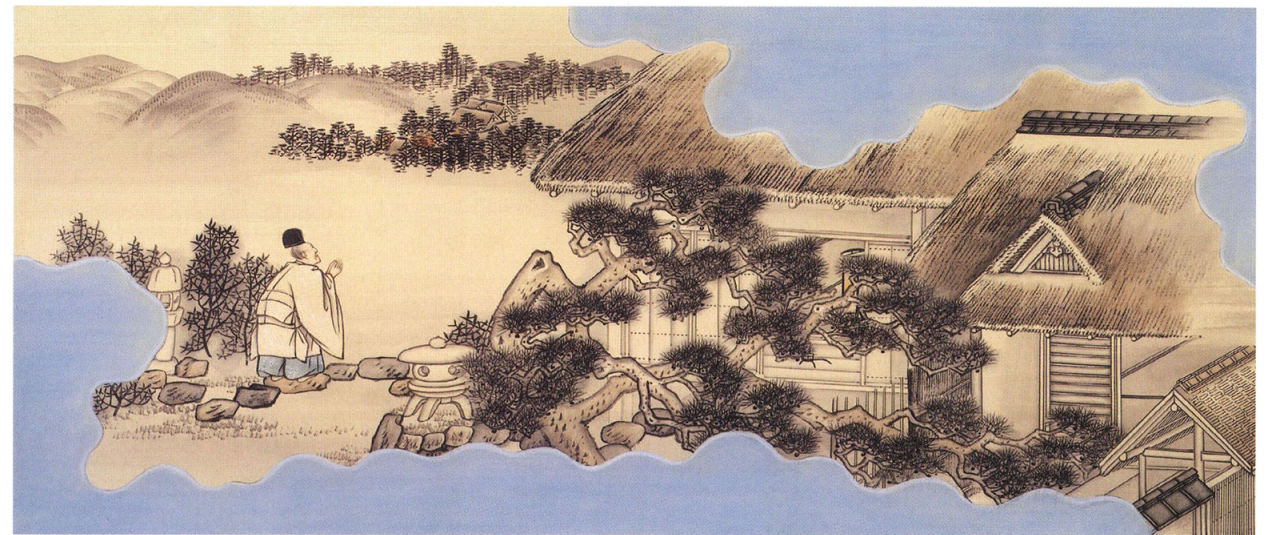


幕府に通じた疑いのあった関白九条尚忠らを御前にて詰問する。

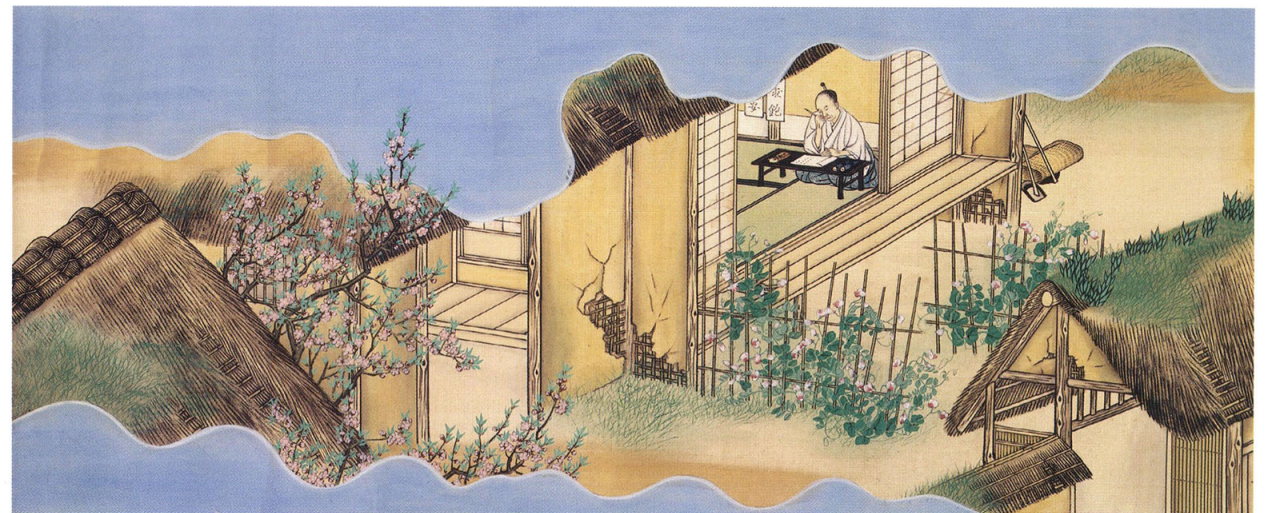
第12巻第3段



安政6年4月、落飾。澹空と号す。 第15巻第1段



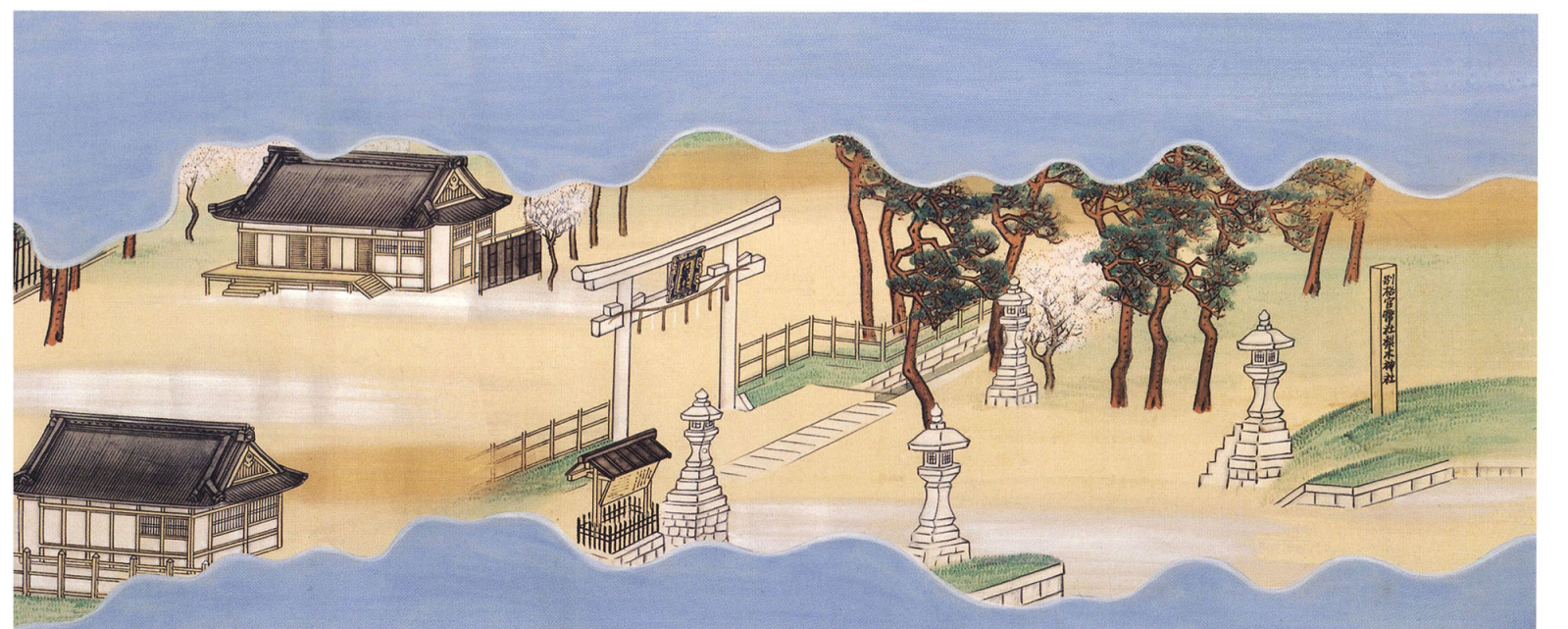
安政6年(1859)3月、幽居の身となるも庭から石清水八幡宮を遥拝する。 第14巻第3段



一乗寺村に移り日夜写経に勤しむ。 第14巻第4段



明治18年(1885)、詔により京都梨木神社に祀られ、神社は別格官幣社となる。



安政6年10月、54歳で没する。文久2年、右大臣追贈。明治2年、忠成の諡号下賜。 第15巻第3段

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治天皇を支えた二人

二条実美と岩倉具視 — 一代絵巻が物語る幕末維新

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 66

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十六年七月十九日発行

© 2014, The Museum of the Imperial Collections